

東北学院大学論集
歴史と文化

(旧歴史学・地理学)

第48号

2012年

東北学院大学学術研究会

福島県双葉郡浪江町
狐塚古墳測量調査報告

辻秀人・新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜

調 査 体 制

調 査 期 間	平成 23 年 2 月 25 日～ 3 月 9 日
調 査 担 当 者	辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
調 査 員	新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜（3 年生） 鹿野恵美・佐々木拓哉・成田 優・服部芳治・松本尚也 森田彩加・横田竜己・佐藤香織・星野剛史（2 年生）
土 地 所 有 者	鈴木安恵・鈴木守 東北電力株式会社 浪江小高原子力準備本部（敬称略）
調 査 協 力	浪江町教育委員会 舩倉 勲・横山精一・荒 淑人・荒 麻美・大谷 基・大谷静香 三瓶秀文（敬称略）

序 章 調 査 の 目 的

第 1 節 調 査 の 目 的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県浜通り地方についてはこれまでに南相馬市原町区の桜井高見町遺跡の発掘調査(辻他 1996)、南相馬市小高区の歓請内古墳の発掘調査(辻 2011)を実施し、同桜井古墳群上洪佐支群 7 号墳の発掘調査(鈴木、吉田 2001)の支援を行ってきた。福島県浜通り地方の古墳時代の様相についてはこれまでに原町市教育委員会(現南相馬市教育委員会)による桜井古墳の発掘調査(荒他 2002)や法政大学による浪江町本屋敷古墳群の発掘調査(伊藤玄三他 1985)などにより明らかにされてきた。そのため、狐塚古墳の測量調査はこれまで不明であった浪江町棚塩地区の古墳時代の様相を解明することを目的として実施した。

引用文献(年代順)

- 伊藤玄三他 1985 年 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
辻 秀人他 1996 年 『桜井高見町 A 遺跡発掘調査報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第 12 集
鈴木文雄、吉田陽一 2001 年 『桜井古墳群上洪佐支群 7 号墳発掘調査報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第 27 集
荒 淑人他 2002 年 『国史跡桜井古墳保存整備事業報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第 31 集
辻 秀人他 2011 年 「福島県南相馬市小高区 歓請内古墳発掘調査報告」 『歴史と文化東北学院大学論集 第 47 号』 pp.1～91 東北学院大学学術研究会

第1章 古墳の立地

第1節 古墳の位置と周辺の地形

浪江町は海岸平野と山地で構成されており、多くの地域は阿武隈高地の山地であり、平地は太平洋に面する海岸平野である、町の中央を請戸川と高瀬川が東流し、海岸近くで合流して太平洋に注ぐ。両河川により比較的広い沖積地が形成されており、沖積地の北側、南相馬市小高区との境と南側、双葉町との境は東西方向にのびる丘陵がある。

狐塚古墳は福島県双葉郡浪江町大字棚塩字狐塚に所在する。請戸川（通称、室原川）・高瀬川が合流する地域の北方に東西に延びる段丘上に立地している。古墳からは両河川が形成した沖積地を一望しうる位置にある。

第2節 歴史的環境

狐塚古墳の所在する丘陵上には多くの古墳・集落遺跡が知られており、狐塚古墳の西約2 kmに本屋敷古墳群がある。本屋敷古墳群は伊藤玄三氏を中心とする法政大学考古学研究室により3年間にわたって発掘調査され（伊藤玄三他 1985）、前方後方墳と方墳で構成される古墳時代前期の古墳群と中期の円墳の様相が明らかにされた。古墳群の主墳、本屋敷1号墳は現在のところ東北地方最古段階の古墳の一つと考えられている。

堂の森古墳は狐塚古墳の西約600 m、北幾世橋字堂の森に位置する。狐塚古墳と同じ段丘上にある。全長は51.1 m、後円部墳丘直径36.4 m、前方部長さ20.7 mを測る大型前方後円墳である（福島県立博物館 1987）。未調査であるため、築造時期等詳細は不明である。後円部に比較して前方部が小さい特徴があり、中期の古墳である可能性が高いと考えられる。狐塚古墳と堂の森古墳の間には円墳で構成される安養院古墳群があり、一連の古墳群を形成する可能性がある。

狐塚古墳の西側から北西にかけて、段丘上の平坦面に鹿屋敷遺跡が広がる。遺跡の中心部が1986年に発掘調査が実施され、古墳時代から奈良・平安時代に及ぶ多数の竪穴住居跡等が検出された（浪江町教育委員会 1988）。また、町道に関わる調査の発掘区では、古墳時代の住居跡や古式土師器などが出土した（浪江町教育委員会 1997）。その他に早期末葉、弥生時代中期の資料が認められる。鹿屋敷遺跡は、この地域の中心的な大規模集落であり、古墳時代にも多くの竪穴住居が分布している。狐塚古墳、安養院古墳群、堂の森古墳はこの集落を営んだ勢力によって築造された可能性が高い。

引用文献

- 伊藤玄三他 1985年 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
福島県立博物館 1987年 「浪江町 堂の森古墳」 『古墳測量調査報告書』
福島県立博物館調査報告書 第16集』 pp.1～3 福島県立博物館
浪江町教育委員会 1988年 『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』
浪江町埋蔵文化財調査報告第6冊
浪江町教育委員会 1997年 『鹿屋敷遺跡試掘調査報告書』
浪江町埋蔵文化財調査報告 第11冊

第2章 測量調査成果

第1節 後円部の調査

①後円部墳頂平坦面

東西約 10.8m、南北方向は平坦面南側が一部壊されているため確認できないが、約 10 mと推定される。平坦面南部が円形に大きく掘り取られているため平坦面の形状ははっきりしないが、おおよそ正円形を呈していたと思われる。墳頂部の標高は平坦部南西部において 25.25 mを観測できた。地表観察では埋葬施設の存在を示唆する痕跡は認められなかった。掘り取られた部分は深さ約 1 m程度で、埋葬施設を大きく破壊しているとは思われない。遺物は発見できなかった。

②後円部墳丘

墳丘南側は標高 23.50 m付近から平坦面にかけて大きな円形な掘り込みと小型の掘り込みが二つ見られる。道路に関わる掘削が標高 20.75 m付近まで及んでいるが墳丘端は 21 m付近と見られ、墳丘端には達していないと判断された。

墳丘西側の墳丘端には南側と同様に標高 21 m付近と見られる。墳丘西側に古墳南側の道路から分かれて伸びる道路が造られており、墳丘西側から北側にかけて墳端が一部削られていると見られた。

墳丘の北側に広がる平坦な場所はかつて畑として使われていたため、墳丘北側の裾部が畑造成の際に削られ、墳丘端はほぼ壊されている。畑造成による墳丘の削平はくびれ部付近で最も大きく、墳丘下部にまで達している。墳端は標高 21 mから 22 mの間にあったと推定される。

後円部墳丘は全体として遺存状況は良好であるが、古墳西側の進入及び北側の畑造成にともない、墳端部は南側を除いて削られている。墳丘等高線の密度に大きな変化はなく、測量の段階ではテラスは確認できなかった。後円部直径約 26.5m、比高約 4 mを測る。

第2節 前方部の調査

①前方部墳頂平坦面

前方部墳頂平坦面は後円部斜面との間に明確な傾斜変換線を認めることが出来ず、スロープ状に緩やかに後円部に接続する。後円部墳頂平坦面に対して前方部墳頂平坦面は非常に低い位置にあり、比高約 3 mを測る。くびれ部付近では古墳北側の畑造成で削られた土が前方部墳丘上に盛り上げられ、一部墳頂平坦面にまで達している。墳頂平坦面は後円部との接続部分が最も狭く、低い。前方部先端にむけて徐々に幅広く、高くなっていき、前方部斜面に接続する。平面形は遺存状況の良い南部から推測すると東西に細長い台形を呈したと思われる。幅は後円部との接続部で約 4.7 m、前端では平坦面北東部の土盛りにより傾斜変換線がはっきりしないが約 10 mと推定される。接続部は標高 22.25 m、前方部斜面に近い最高所で 23.00 mを測る。前方部前端で周囲との比高は最大で 1.25 mである。

②前方部墳丘

墳丘北側は、古墳北側の畑造成で削られた土が盛り上げられ、本来の斜面の姿を残していない。前方部北東角にとりつく土手状の盛り上がりも同様に畑の造成により、後世に作られたものである。

前方部墳丘東側、前方部前端斜面は北側を除いて遺存状態は良好であった。墳丘斜面は緩やかで、墳端も明瞭ではなかったが、主軸上で 22.25 m、斜面南側で 22.75 m の等高線付近と見られる。

前方部墳丘南側は遺存状態は良好で、本来の墳端を保っている。墳丘斜面は緩やかで、事前地形との識別が難しく、墳端ラインを確定できなかった。等高線の流れから見て標高 21.00 m 付近に墳端があると推定された。

前方部北側は全体に畑の造成に関わる削平、盛り土によって変形されているがその他は良く本来の姿を保っていた。長さは 26 m 前後で後円部直径とほぼ等しい。前方部前端 15 m 前後と推定される。全体に「ハ」の字状に開く台形を呈している。テラスは後円部同様に今回の調査では確認できなかった。

(新沼裕伸、熱海泰輔、千葉優菜)



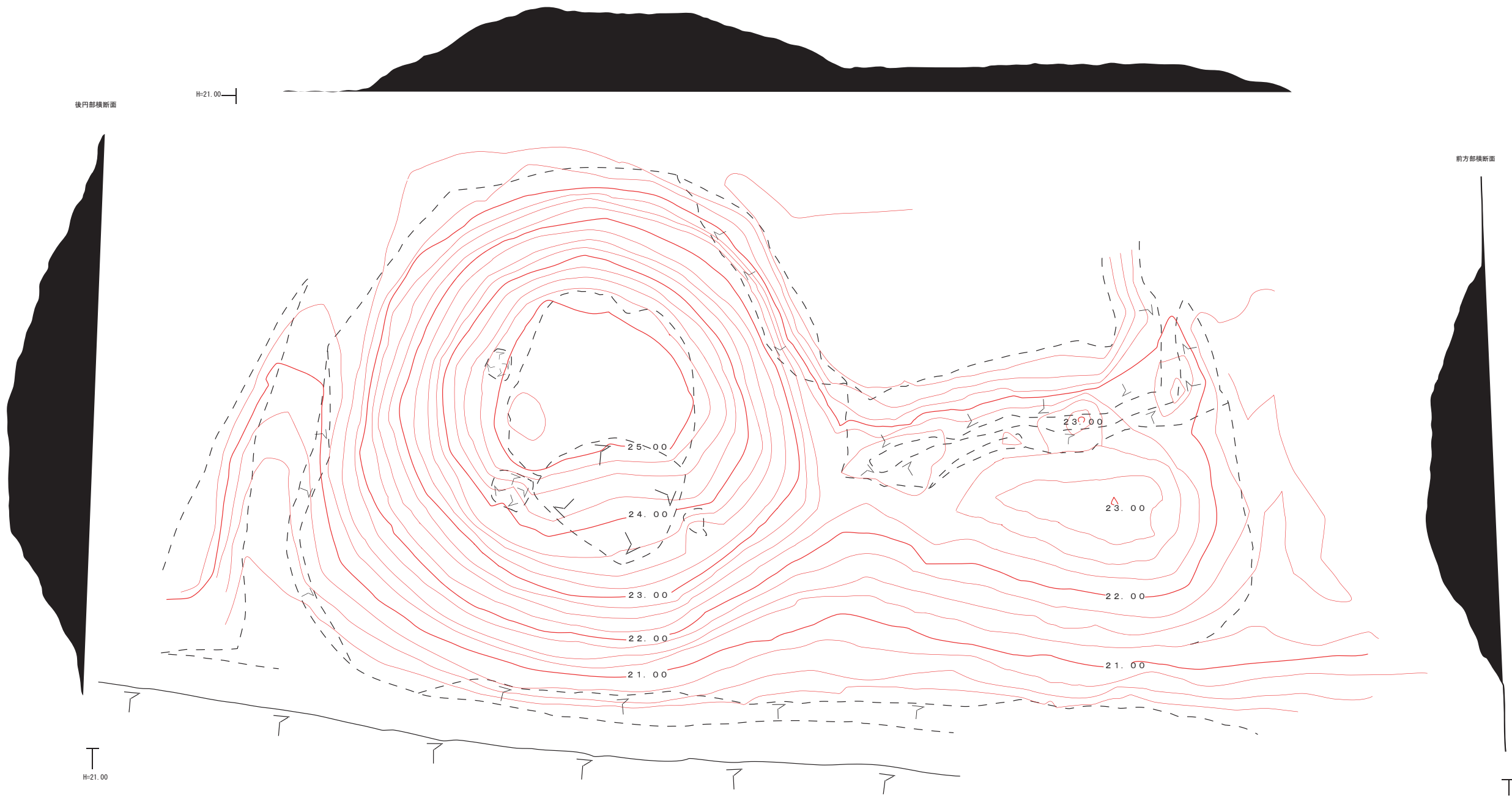
狐塚古墳全景 前方部から後円部を望む

古墳断面

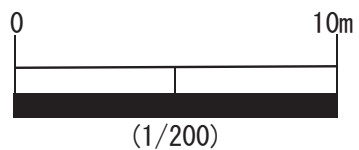
後部断面

H=21.00

前方部断面



第2図 狐塚古墳測量図



第3章 まとめ

測量調査の結果、狐塚古墳は丘陵頂部の地形を利用して築かれた東北地方においては比較的大型の前方後円墳であることが判明した。古墳は前方部を東に東西方向を主軸として築造されている。全長約 46 m、後円部直径 26.5m、後円部比高約 4 m、前方部長さ 26 m 前後、前方部前端 15 m 前後、前方部比高 1.25m を測る。全体の形状は後円部に比較して前方部の幅がせまく、細長い点に特徴がある。浪江町内では同じ丘陵の東側にある堂の森古墳（福島県立博物館 1987）に次ぐ規模である。

古墳の北側にはかつて畑が造成されていたため、墳丘北側は後円部北東部からくびれ部、前方部にかけて一部削られており、前方部では削られた土が古墳墳丘に盛られているために本来の姿を保っていない。また、後円部墳丘平坦面の南側には小さくぼみがあり、掘削された痕跡と見られた。その他の部分はほぼ損傷はなく、保存良好である。

狐塚古墳の特徴は後円部に比べて前方部が低いことにある。前方部の比高はわずか 1.25 m であり、墳丘南側の墳端はきわめて不明瞭であった。古墳の正確な規模は発掘調査で明らかにする必要がある。

古墳の後円部直径と前方部長さはほぼ近い数字であり、全体に前期古墳に近い様相である。西側約 600 m にある堂の森古墳と比較すると前方部長さはほぼ等しく、後円部直径が 10 m 近く小さい。狐塚古墳の後円部をやや拡大すると堂の森古墳の姿になるという関係で、両者は良く似ており、中間にある安養院古墳群（浪江町教育委員会 2007）と合わせて一連の古墳群を形成すると言えよう。

古墳群は東西にのびる丘陵上の南側に分布している。丘陵中央の平坦面には古墳時代から古代にかけての大規模な集落、鹿屋敷遺跡があり（浪江町教育委員会 1988）一連の古墳群の造営は鹿屋敷遺跡を中心とする集落により実施されていたと考えられる。

古墳の築造時期は、墳丘に遺物が確認できず、明確にはできない。堂の森古墳はこれまで古墳時代中期と推測されており、狐塚古墳は堂の森古墳よりもやや古い様相をもっており、これよりやや古く古墳時代前期の可能性を考えておきたい。

築造時期も含めて、狐塚古墳の本来の姿は発掘調査で明らかにする必要がある。しかし、残念ながら福島第 1 原発の事故により、近い未来に発掘調査を実現することは困難になってしまった。大震災、原発事故の直前に測量調査を実施でき、古墳の外形を明らかにできたことはわずかな救いではあるが、狐塚古墳の実態解明、保存活用を含め、将来に委ねられることになった。

浪江町ひいては大震災により被災し、原発事故により放射線の影響を受けたすべての文化財が除染、修復、保存され地域の共有の財産として活用されることを祈りたい。

（辻 秀人・新沼裕伸、熱海泰輔、千葉優菜）

引用文献

- 福島県立博物館 1987 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集
浪江町教育委員会 2007 『浪江町文化財分布図』
浪江町教育委員会 1988 『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』浪江町埋蔵文化財調査報告第6冊

謝辞

狐塚古墳の測量調査にあたり、古墳所在地を所有されます、鈴木守氏、鈴木安恵氏、鈴木明氏、東北電力株式会社様には調査を快諾して頂き、浪江町教育委員会には調査に全面的に御協力いただきました。心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたりまして万端の手配をいただきました浪江町教育委員会伊東重幸氏、調査にご協力下さいました東北電力株式会社浪江・小高原子力準備本部松原仁氏、宿舎のご提供をいただきました南棚塩区长榊倉勲氏、土地を借用させていただきました浪江町町会議員横山精一氏の皆様に御礼を申し上げます。

2011年3月9日午後、古墳上で夏の発掘調査の打合せをしている時に大震災の前触れとなる大きな地震に遭遇しました。私どもは9日のうちに仙台にもどりましたので、被災を免れましたが、お世話頂いた地域の皆様が東日本大震災で被災されたことを知り、胸が痛い思いしております。亡くなられた皆様に謹んで哀悼の意を表しますと共に、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。



古墳南側の道路から後円部墳頂を望む



後円部墳頂から前方部



前方部全景

福島県喜多方市
灰塚山古墳第1次発掘調査報告

辻秀人・鹿野恵美・佐々木拓哉・成田 優・服部芳治
松本尚也・森田彩加・横田竜巳・佐藤香織・星野剛史

調 査 体 制

調 査 期 間	平成 23 年 8 月 10 日～ 8 月 24 日、9 月 4 日～ 12 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール
調 査 員	新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜（4 年生） 服部芳治・吉田龍司・星野剛史・森田彩加・横田竜巳・佐々木拓哉・ 鹿野恵美・佐藤香織・成田 優・松本尚也（3 年） 川口 亮（東北大学大学院文学研究科 1 年）
調査参加者	青田花子・秋元絵里奈・石橋咲紀・上野亮太・加藤和子・今埜翔平・ 櫻田陽子・佐藤妙子・菅原綾香・高橋萌子・武田翔平・田村優衣・ 花輪玲奈・日谷 旭（2 年） 芦野 悟・岸 知宏・中島浩貴（1 年）
調 査 協 力	喜多方市教育委員会・東洋興産株式会社・ 山中雄志（喜多方市教育委員会）・片岡洋（喜多方市教育委員会） 渡辺和男（新宮区区長） 竹谷陽二郎（福島県博物館） 菅原 望（東北学院大学院生）・大谷 基・大谷静香）
土地所有者	新宮区

例 言

- 1、本書は平成 23 年 8 月 10 日～ 8 月 24 日、9 月 4 日～ 12 日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第 1 次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属の学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、考古学実習 I を履修する学生及び参加を希望した歴史学科 1 年生である。他に東北大学大学院の学生が参加した。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部史学科考古学ゼミナール所属の 3 年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は、調査参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆者の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示している。

序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多くの古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群は前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である（辻 2006）。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され（福島県立博物館 1987）、全長 60 m を越える大型前方後円墳であることが判明している。ただし、出土遺物がないため、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確でない。

本調査は宇内青津古墳の北端の大型前方後円墳である灰塚山古墳の姿を解明することを目的として実施した。今年度の調査ではまず墳丘の姿と墳端部を確認するため、想定される主軸上に沿って前方部と後円部墳丘にトレンチを設定するとともに、墳頂部の様相を解明するために前方部、後円部墳頂の調査を合わせて実施した。今後灰塚山古墳の全体像を解明するため、継続的に調査を実施していく予定である。

引用文献（年代順）

福島県立博物館 1987 年 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第 16 集
辻 秀人 2006 年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社



写真1 前方部墳頂調査風景

第1章 古墳の立地

第1節 古墳の位置と周辺の地形

第1節 古墳の位置と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に立地する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にある丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している（註1）。

第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群註の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後方墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、白が森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ガ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳、鎮守森古墳は近年いずれも前期古墳と考えられており、他に森北1号墳、雷神山1号墳、虚空蔵森古墳、出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない（第1図）。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館跡であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は当然宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳が考えられている。いずれの古墳も未調査で築造時期が確定せず、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

なお、灰塚山古墳立地する独立丘陵は国指定史跡新宮城跡と接する位置にある。新宮城跡は中世の城館であり、中心部分はよくその姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存続したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見たときに、最も近い小高い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置には新宮氏の墓所が想定されており、中世においても使われた可能性が高い。

註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。



1. 灰塚山古墳
2. 天神免古墳
3. 虚空蔵森古墳
4. 長井前ノ山古墳
5. 鍛冶山 4号墳
6. 雷神山 1号墳
7. 出崎山古墳群
8. 森北 1号墳
9. 鎮守森古墳
10. 亀ヶ森古墳
11. 白が森古墳
12. 杵が森古墳
13. 新宮城跡
14. 古屋敷遺跡

第 1 図 宇内青津古墳群分布図

第2章 発掘調査成果

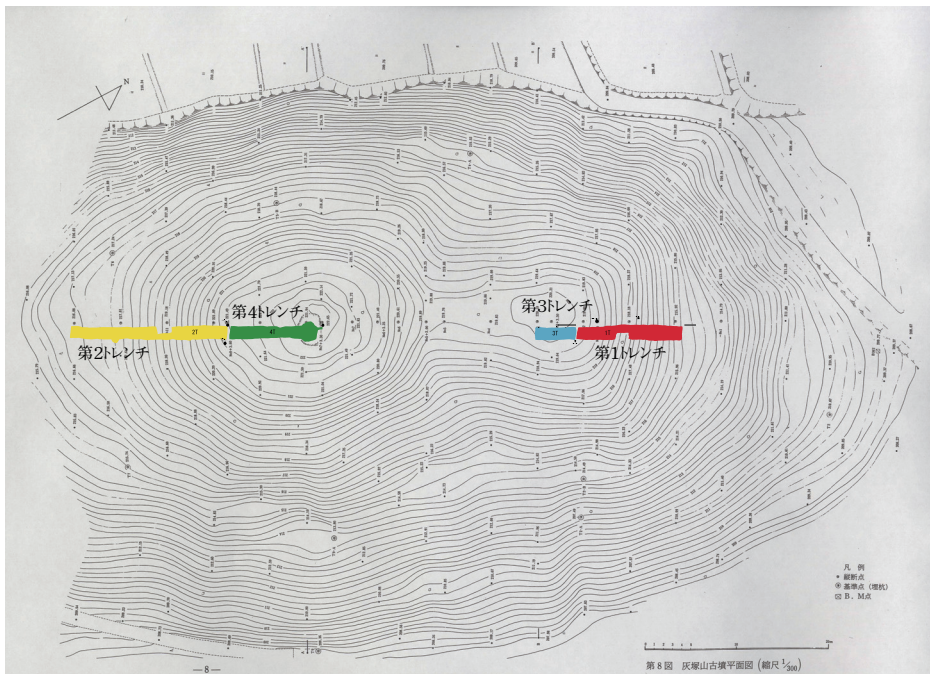
1、第1トレンチ（第3図、写真2、3）

前方部の墳丘構造を把握するとともに、墳端を確認することを目的として第1トレンチを設定した。第1トレンチは想定された主軸に沿って墳頂平坦面から墳端にかけて幅2m、長さ11mに設定した（第2図）。

トレンチ内の表土及び墳丘流出土層を掘り下げ、墳丘面を確認した。墳丘面を精査したところ、墳丘面は5枚の土層が人された。上層から、（1）黄褐色の礫混じりの層、（2）黒褐色で南端よりも大きな礫を含んだ層、（3）南端と土色は近いものの礫をあまり含まない層、（4）明赤褐色で一部オレンジ色の土が含まれた層、（5）明黄褐色で一部灰白色の土を含む層である。（1）、（2）、（3）層は礫を含むことや地山の粒子が混在するなど、人為的に動かされた様相が観察され、墳丘積み土と判断した。（4）、（5）層はシルト質で均質な層で、層の境も漸移的で、地山と判断した。従って前方部の墳丘は地山を削り出すとともに、削られた土を積み上げることで作られていることが判明した。墳丘斜面にはテラスは存在せず、前方部は一段であることが判明した。

墳端は（5）層を削り、平坦面と墳丘斜面の角度を明確に変えることで作り出されていた（写真）。墳端の位置は測量段階の想定よりもやや内側にあり、測量で求めた規模よりも実際の古墳の墳長はやや小さいと考えられた。

（森田彩加）



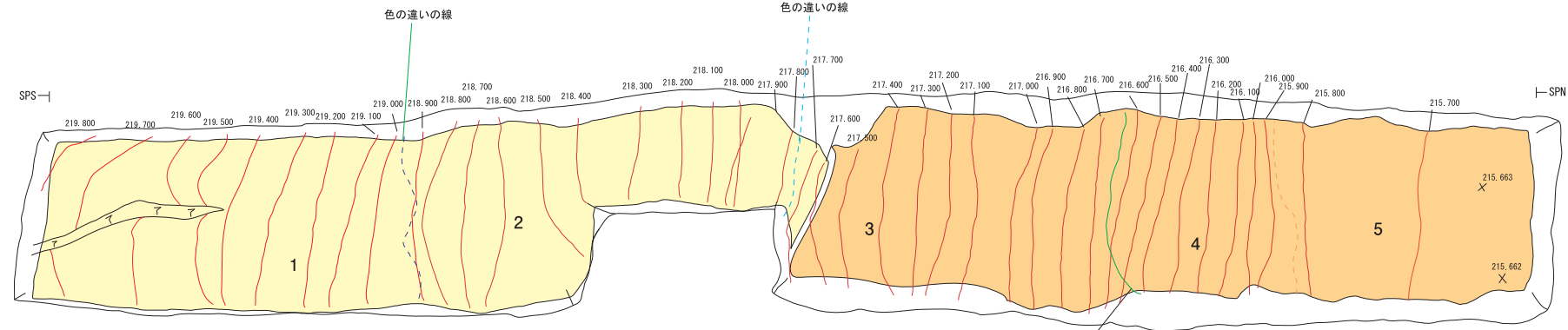
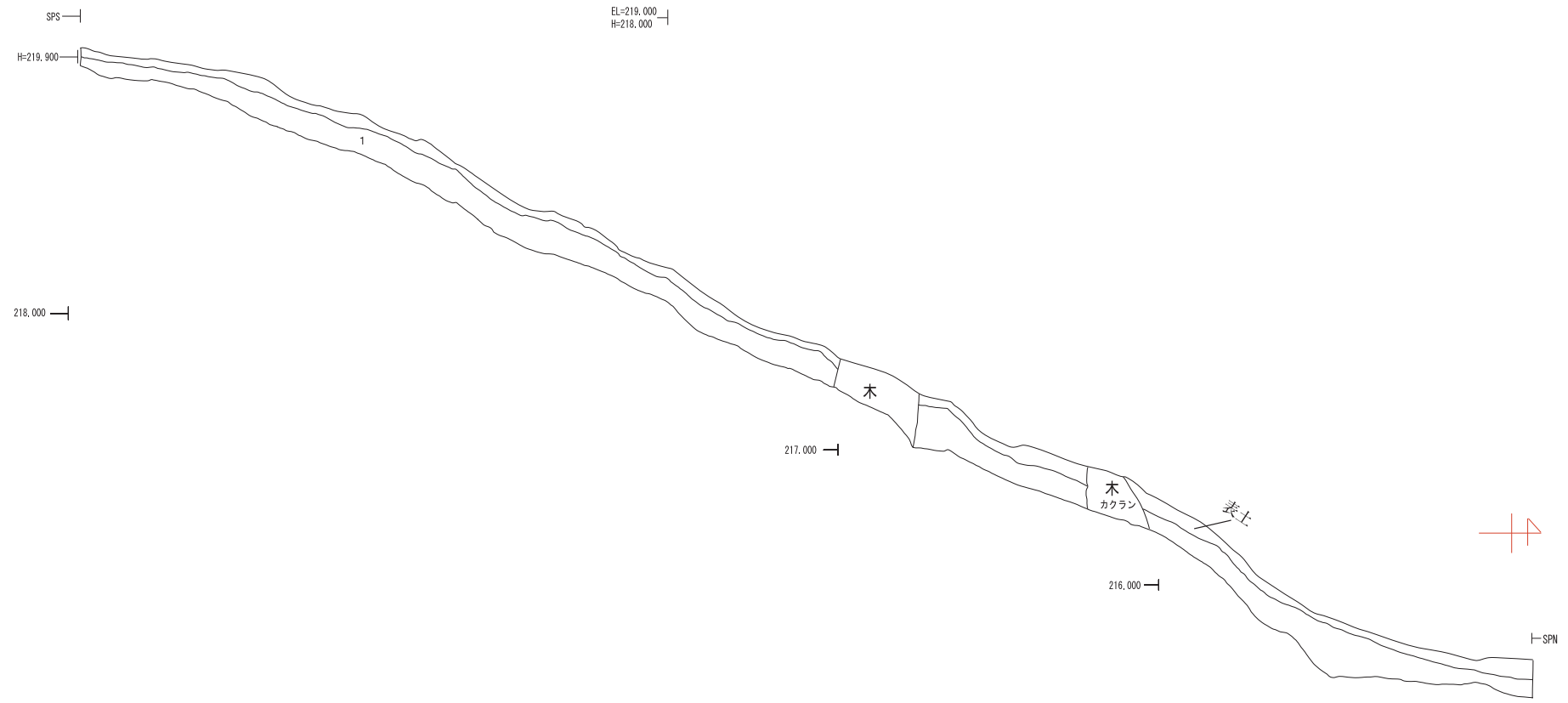
第2図 トレンチ配置図



写真2 第一トレンチ全景

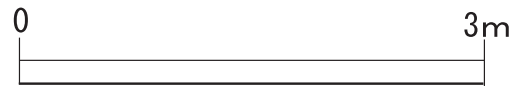


写真3 前方部墳端



1トレンチ断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue10YR5/6 黄褐	弱	弱	シルト	表土
1	Hue2.5Y7/6 明黄褐	弱	中	シルト	



(1/60)

1トレンチ平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue2.5Y 5/4 黄褐	弱	中	シルト	礫が10%混入
2	Hue7.5YR3/2 黒褐	弱	弱	シルト	極大の礫が5%混入
3	Hue2.5Y 6/4 にぶい黄	弱	弱	シルト	一部礫が混入 Hue10YR5/6黄褐が30%混入
4	Hue5YR5/8 明赤褐	弱	弱	シルト	Hue10YR5/8浅黄橙が25%混入
5	Hue2.5Y7/6 明黄褐	弱	中	シルト	Hue5Y8/2灰白が10%混入

2、第2トレンチ（第4図 写真4～7）

後円部墳丘構造と墳端の確認のため、古墳の主軸と並行して1トレンチの延長戦上に第2トレンチを設けた。調査区は全体として、後円部の墳丘平坦面の南端より主軸に沿って長さ18m、幅1.5mで設定した。また、調査途中でトレンチの中ほどに墳丘傾斜が緩くなっているため、そこにテラスが存在する可能性も考え、その確認を途中から二つ目の目標とした。

表土と墳丘流出度を除去し、後円部墳丘面を検出した。墳丘面は後円部墳調布近から下方にのび、標高218.5m付近で一旦傾斜が緩やかになり、その下部でまた急傾斜となって墳端に至る。この緩やかな部分は幅約1mでテラスの可能性はある。ただ、テラス面と考えた場合、ゆるやかであっても傾斜があることに疑問が残り、その判断は今後の後円部の調査でこの緩やかな部分の存否が確認できるまで保留することとした。

墳丘斜面を構成する土層は標高219m付近を境に上半が黄褐色の土層、下半が均質な白色土層に分かれた。上半には礫が混じり、地山由来の粒子が混入するなど人為的に動かされた層で墳丘積み土と判断した。下半は地山である。後円部墳丘も前方部と同じく地山を削り出し、削られた土を積み上げることで作られていることが判明した。

後円部墳丘は前方部と違い比較的緩やかに墳丘外側の平坦面に移り変わっていくために墳端は必ずしも明瞭ではない。現状で判断すれば、標高217.4m付近の緩やかな斜面から平坦面に移り変わる部分が墳端と考えられる。

なお、地山の七折坂層は、会津盆地西縁を南北に走る断層に近いいため、傾斜を持っている様子が観察される。(写真7) (横田竜巳)



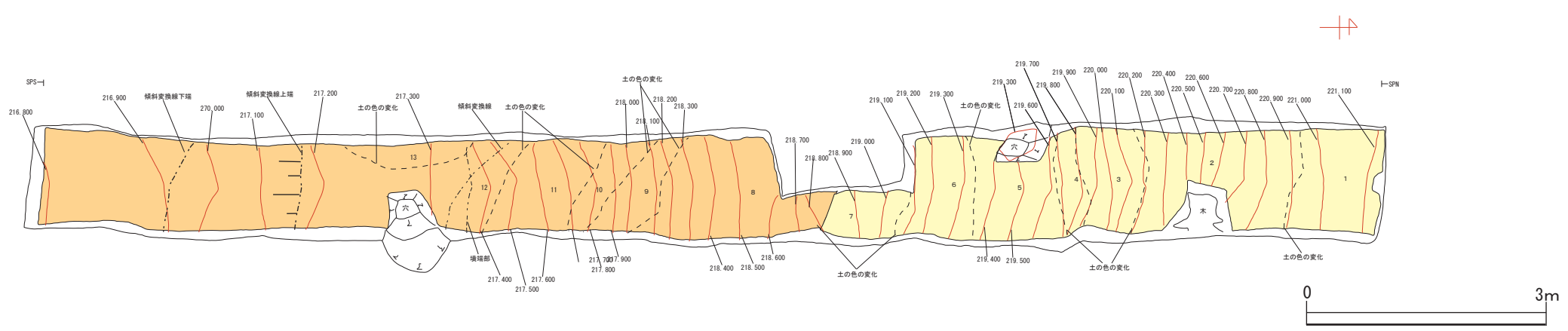
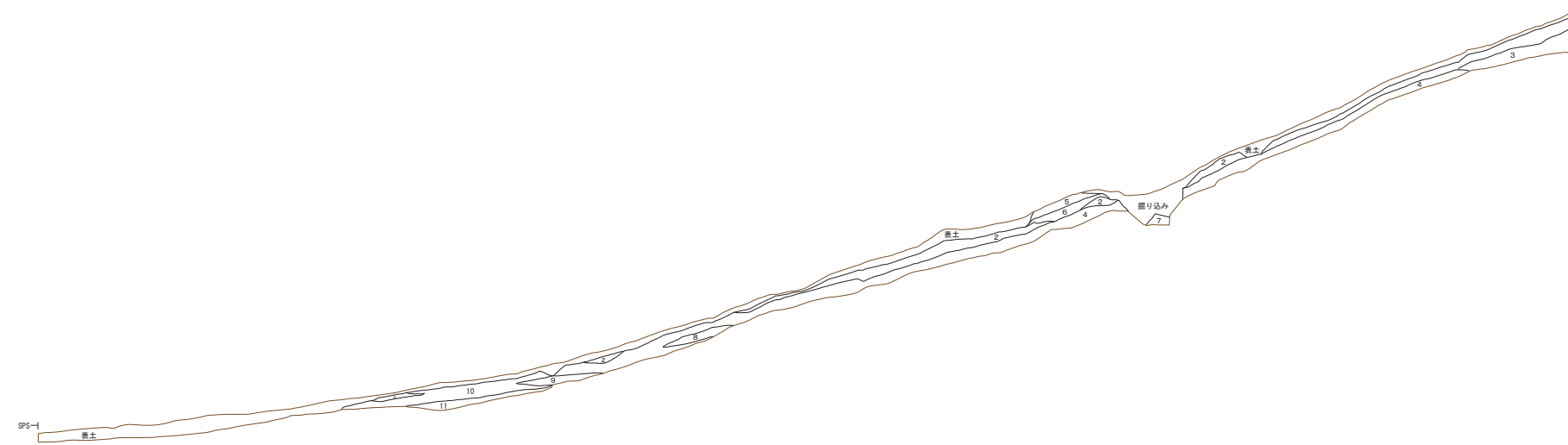
写真4 第2トレンチ 調査風景



写真5 第二トレンチ全景



写真6 地山（七折坂層の傾き）



2トレンチ断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue10YR2/3 黒褐	弱	弱	シルト	表土
1	Hue2.5Y7/3 浅黄	弱	弱	シルト	
2	Hue2.5Y7/4 浅黄	弱	弱	シルト	
3	Hue2.5Y6/6 明黄褐	弱	弱	シルト	大の礫が25%混入 極大の礫が10%混入
4	Hue2.5Y6/4 にぶい黄	弱	中	シルト	
5	Hue2.5Y7/4 浅黄	弱	弱	シルト	
6	Hue10YR2/2 黒褐	弱	弱	シルト	
7	Hue2.5Y5/4 黄褐色	弱	弱	シルト	
8	Hue2.5Y5/4 黄褐色	弱	弱	シルト	大の礫が10%混入 極大の礫が15%混入
9	Hue2.5Y5/4 黄褐色	弱	弱	シルト	中の礫が10%混入 大の礫が5%混入
10	Hue2.5Y5/4 黄褐色	弱	弱	シルト	
11	Hue2.5Y6/6 黄褐色	弱	中	シルト	Hue10YR6/6明黄褐色6/8が10%混在

2トレンチ平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR6/4 にぶい黄橙	弱	弱	シルト	極大の礫が25%混入
2	Hue10YR5/4 にぶい黄褐	弱	弱	シルト	大の礫が10混入 Hue10YR6/8明黄褐が5%混入
3	Hue7.5YR5/8 明褐	中	弱	シルト	Hue7.5YR7/6橙が3%混入
4	Hue10YR7/3 にぶい黄橙	弱	弱	シルト	
5	Hue2.5Y5/4 黄褐	弱	弱	シルト	Hue2.5Y6/8明黄褐が20%混入
6	Hue2.5Y5/4 黄褐	弱	弱	シルト	極大の礫が25%混入
7	Hue2.5Y6/6 明黄褐	弱	弱	シルト	Hue10YR6/8明黄褐が30%混入
8	Hue2.5Y6/6 明黄褐	弱	弱	シルト	Hue10YR6/8明黄褐が25%混入
9	Hue2.5Y5/4 明黄褐	弱	弱	シルト	Hue2.5YR6/8明黄褐が20%混入
10	Hue2.5Y5/4 明黄褐	弱	弱	シルト	極大の礫が25%混入
11	Hue2.5Y6/6 明黄褐	弱	弱	シルト	Hue2.5YR6/8明黄褐が30%混入
12	Hue2.5Y7/6 明黄褐	弱	弱	シルト	
13	Hue2.5Y6/6 明黄褐	弱	弱	シルト	Hue2.5YR6/8明黄褐が25%混入

3、第3トレンチ（第5図、写真8、9）

前方部墳頂平坦面の様相を探索するため、第1トレンチ南側から続く主軸上にトレンチ西壁をあわせ、トレンチを設定した。

トレンチ内の表土を除去し、1トレンチとの関係調べるために1トレンチで検出した墳丘面まで掘り下げを行なった。第3トレンチ北側では第1トレンチから続く墳丘面と見られる黄色の土が確認された。この面を精査したところ、第3トレンチの中央から南側にかけての西側に土壙 (SK01) が検出された。土壙内の埋め土は礫の混じりの土で、遺物は出土しなかった。土壙は浅い皿状で、その性格は不明である。土壙は古墳築造後に掘られたと見られる。今後は前方部墳頂平坦面の全体の様相を把握するため、調査範囲を広げる必要がある。

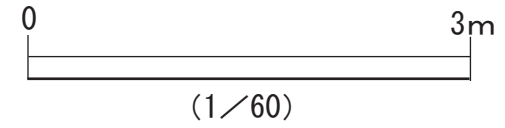
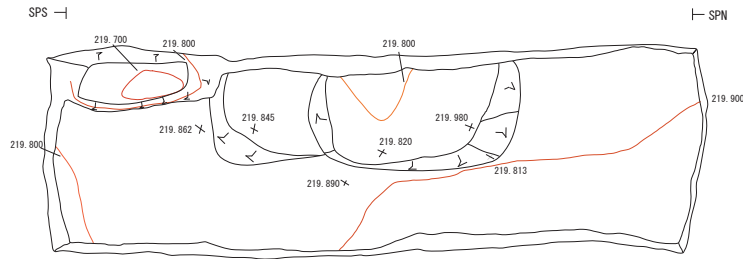
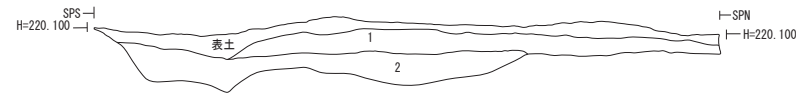
(星野剛史)



写真7 第3トレンチ全景



写真8 土壙 (SK01)



3トレンチ 断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue2.5Y3/3暗オリーブ褐	弱	弱	シルト	表土
1	Hue2.5Y5/4黄褐	弱	中	シルト	
2	Hue2.5Y7/4浅黄	弱	中	シルト	極大の礫30%混入

3トレンチ 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue2.5Y6/4にぶい黄	弱	弱	シルト	極大の礫30%混入

第5図 第3トレンチ平面、断面図

4、第4トレンチ（第6図 写真10, 11）

灰塚山古墳の後円部墳頂平坦面は、一般的な古墳と違って、本来ならば平坦である部分が塚状に盛り上がっていた状態になっている。塚状の盛り上がり、古墳築造時に構築されたものか後世に付加されたものかを判断することは古墳を理解する上で重要である。第4トレンチは塚状遺構の性格を追究するとともに、後円部墳頂平坦面の様相を把握するために古墳主軸にそって長さ約10メートル、幅50センチの第4トレンチを設定した。トレンチ内塚状遺構のほぼ中央部には直径1m程度の穴が掘られており、新しく掘られたと判断したため、まずこの穴の中に堆積した土を除去し、基本的な層序を確認した。

穴内部に堆積した土を除去した後、断面の清掃を行った。その結果、大量の河原石の集積を発見した。川原石の集積には土は全く混在しない状態で、人為的に積まれたものと考えられた。川原石の集積の上層には茶褐色の土層が確認された。この土層は旧表土の混じる比較的汚れた土であり、人為的に積まれたものと判断した。これらの状況から、後円部墳頂平坦面には多量の川原石と積み土からなる塚が築かれていると考えられた。古墳本来の施設とは考えられず、隣接する国史跡新宮城に関わる遺構の可能性もある。塚状遺構の性格解明は次年度以降の調査の課題である。

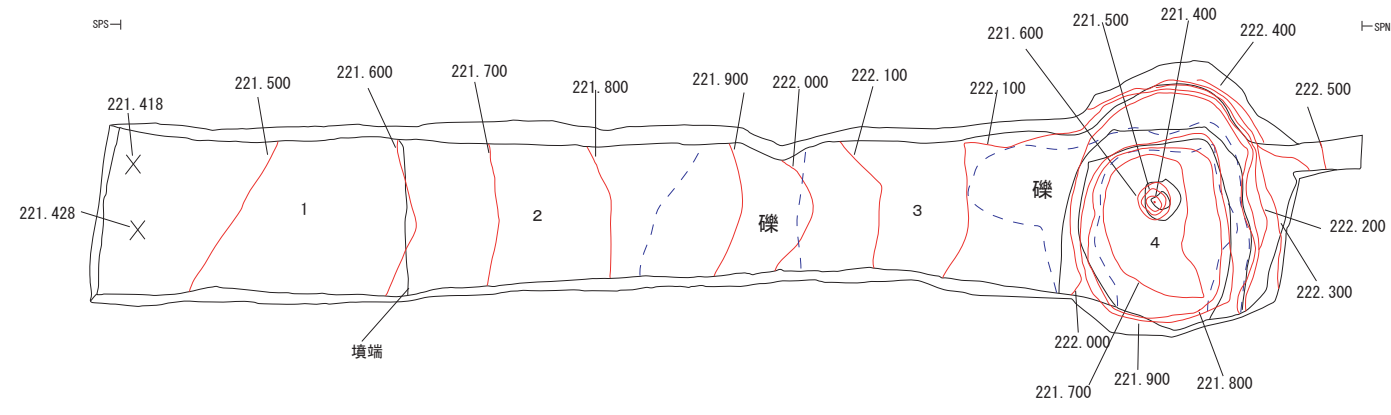
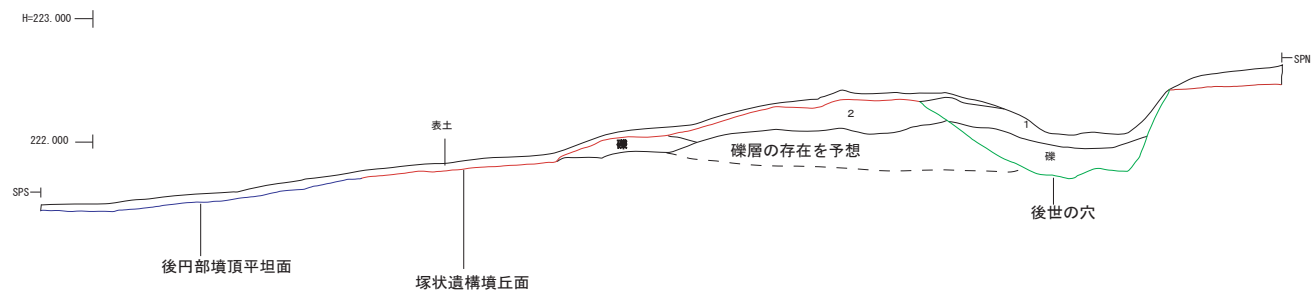
第4トレンチの南側では墳頂平坦面を検出した。墳頂平坦面を構成する土は平坦で後円部南斜面に連続的につながっていく。古墳本来の墳頂平坦面上は特に何らかの施設を設けた様子は見られなかった。
(佐々木拓哉)



写真9 第4トレンチ全景



写真10 塚状遺構断面図

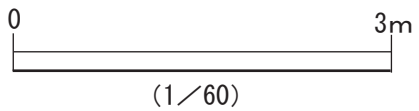


4トレンチ 断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
	Hue7.5YR3/2黒褐	弱	弱	シルト	
1	Hue10YR4/3にぶい黄褐	弱	中	シルト	極大の礫10%混入
2	Hue10YR4/4褐	弱	中	シルト	大の礫20%混入

4トレンチ 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR4/3にぶい黄褐	弱	中	シルト	極大の礫5%混入
2	極大以上の礫の層				
3	Hue10YR5/6黄褐	弱	中	シルト	
4	Hue10YR4/4褐	弱	中	シルト	極大の礫3%、中の礫10%混入



第6図 第4トレンチ平面、断面図

第3章 まとめ

喜多方市灰塚山古墳は、一箕古墳群、雄国山麓古墳群とならぶ会津盆地に分布する主要な古墳群の一つ、宇内青津古墳群内最北の大型古墳である。福島県立博物館により、測量調査が実施され（福島県立博物館 1987）、全長61.2m、後円部直径33.2m、前方部長さ27.6mの大型前方後円墳であることが判明した。

今回の調査はこれまで外形だけが判明していた灰塚山古墳の実態を発掘調査によって明らかにすることを目的として実施した。調査は今後5年程度は継続して実施し、灰塚山古墳の全体像にせまりたいと考えている。

今回の第1次調査では、古墳主軸上に前方部墳丘斜面、前方部墳頂平坦面、後円部墳頂平坦面、後円部墳丘斜面にトレンチを設定し、その様相把握に努めた。

前方部斜面では自然地形を削りだして形成した明瞭な墳端部を検出すると共に墳丘下半は自然地形のケズリだし、上半は積み土によって形成されていることが明らかになった。

前方部墳頂平坦面は調査区が狭く、全体的な様相把握には至らなかったが、浅い窪みに小礫が充填されている状況があり、古墳築造以後に利用されている可能性が考えられた。

後円部墳頂平坦面では、調査前から観察された小墳丘状の盛り上がり小礫と若干の積み土で構成されていることが判明し、経塚あるいは墳墓など中世の遺構が存在している可能性があるとして理解された。

後円部墳丘では前方部と同様に墳丘下半は自然地形のケズリだし、上半は積み土によって形成されていることが明らかになった。墳端はゆるやかに平坦面に移行するため、場所を特定には至らなかったがほぼ認識することができた。墳丘の中程に傾斜が緩やかになる部分があり、テラスの可能性が考えられたが、断定を避け今後の調査成果と総合して判断することにした。

今年度は第1次調査であったため、古墳の様相把握につとめ、詳細は今後の調査で検討する予定である。なお、古墳の西側には国指定史跡新宮城跡があり、至近距離にある灰塚山古墳の上に古代中世の遺構が存在する可能性が高く、今後の調査は十分留意して勤める予定である。

引用文献

福島県立博物館 1987 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集

謝辞

灰塚山古墳の発掘調査にあたり、古墳所在地を所有されます、新宮区の区長渡辺和夫氏には調査を快諾して頂き、喜多方市教育委員会には調査に全面的に御協力いただきました。心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたりましては万端の手配をいただきました浪江町教育委員会山中雄志氏、片岡洋氏、宿舎を借用させていただきました矢部善兵衛氏に御礼を申し上げます。

調査報告書

宮 本 勢 助

「山袴全国方言調査紙（昭和九年）」

加藤 幸治編

目 次

第一部

宮本勢助の服飾研究と

「全国山袴方言調査紙」調査の意義

加藤 幸治

はじめに

- 1 モンペの虚像と実像…………… 45
- 2 宮本勢助とはだれか…………… 46
- 3 山袴とは何か…………… 47
- 4 一九三四（昭和九）の宮本勢助
による袴全国調査…………… 49
- 5 大日本聯合青年団による山袴
全国調査…………… 52
- 6 重要有形民俗文化財
「山袴コレクション」…………… 53
- 7 「全国山袴方言調査紙」の資料的意義
…………… 55
- 8 宮本勢助の山袴研究の到達点…………… 56
- 9 調査の契機と経緯…………… 58

第二部

資料紹介：「山袴全国方言調査紙」の翻刻

山袴調査資料研究会

- 凡 例…………… 63
- 資料紹介…………… 64
- イラスト一覧…………… 225

一部

宮本勢助の服飾研究と「全国山袴方言調査紙」調査の意義

加藤幸治

1 モンペの虚像と実像

モンペと聞いて、どんなイメージを抱くだろうか。おそらく多くの人が、頬を赤くして子守をする田舎娘や、畑仕事にいそしむ農家の女性を連想するであろう。あるいは勤労働員で労働する戦時中の女性を思い浮かべるかもしれない。しかし、もしそれが事実の一面にすぎず、単なるイメージにすぎないとしたらどうだろう。モンペやタツツケ、カルサン、ユキバカマなど、様々に呼称されてきた庶民の労働着を山袴（やまばかま）と総称して研究した宮本勢助は、全く違った印象でモンペをとらえていた。

発想を転換するには、いくつかの例を挙げるだけで十分である。開拓期の北海道では穿きものを見るだけで出身地が知れたというほど労働の袴には地域差があった。福島県では雪国の結婚式で特別にあつらえる袴があった。山形県では若い女性の健康美と結び付けられてモンペを穿いた少女のプロマイドのような絵葉書が作られた。西日本の山間地域で猟師が穿く袴は、シカ皮製のゆったりしたものでカルサンと称される。そのカルサンの語源はポルトガル語であった。かつて信長や秀吉、家康ら戦国武将らはカルサンを最新ファッションとして楽しみ、贈与に用いられた。近世後期に至ってそれらは身近な労働着として定着した。山袴は武士の稽古着として定着したために現在でも剣道や合気道のユニフォームとなっている。相撲の呼出しや歌舞伎の黒子が山袴を穿いているのは労働着としての性格を色濃く残している。鹿踊りや神楽などの動きの激しい民俗芸能の衣装には現在でも山袴が用いられている。労働の袴は近代の女学校の服装として再構築された。その名残は現在の大学の卒業式で女子学生が穿く袴に見ることができる。こうした山袴の多様な存在の仕方をすべて覆い隠すかのように、モンペのイメージは農家の勤勉な女性の労働に一元化されていった…。

衣服は、機能と目的に基づいてのみ作られるものではない。何を着るかは、それを着る人物の社会的位置や貧富の程度を表象し、個人の嗜好を反映するものである。そしてそこには政治が介入する。服飾の歴史と文化、とりわけ庶民のそれを明らかにすることは、それぞれの時代の生活世界に肉薄する方途である。

初期の民具研究は、そうした問題意識を明確に持っていた。それゆえ調査法の様々な実験が行われたし、歴史学が用いないオルタナティブな研究素材の獲得に熱心であった。その新たな研究素材のひとつが言語の地域差、つまり方言であった。現在でこそ民俗学は野外調査を当たり前のように行うが、方言のデータを獲得するための旅である採訪は、当時としては斬新な調査方法であった。本稿で紹介する、昭和九年に宮本勢助が行った調査研

究の一次資料である「全国山袴方言調査紙」（宮本記念財団所蔵）は、そうした背景のもと行われた調査の成果物である。

この資料は、後述するように最初に重要有形民俗文化財に指定された三件の文化財のひとつである「山袴コレクション」と一体の民俗学の研究資料であるばかりか、第二次世界大戦中に国民服としての性格を有したいわゆるモンペの普及にも一定の役割を果たした可能性がある歴史資料でもある。しかしこれまで、この資料の存在そのものが紹介されることはあっても、その内容については調査されてこなかった。

本研究は、資料を研究に供するため、その内容を翻刻することを目的としている。

2 宮本勢助とはだれか

本資料の調査を行った宮本勢助（一八八四～一九四二）は、民俗学の草創期の重要人物であるにもかかわらず、学史に登場しない。

勢助その人については、没後に刊行された論集『麝香の臍』（宮本勢助一九四四）の巻頭に以下のようにまとめられている。

措衣、宮本勢助は、明治十七年二月二十六日、東京下谷区池之端六七番地に於いて、宮本龜吉の二男として誕生す。

始め画家を志して、東京美術学校予備校美術学館及び小堀鞆音の門に学ぶ、後、画家を廃して、服飾の研究を生涯の事業とす。明治四十一年より昭和十七年に至る三十余年間に発表せる論考凡そ二百篇。それ等は概ね風俗史・服飾史・服飾学に関する研究であって、本名のほか措衣・摺衣・紅紐等の仮名に依って執筆せられて居る。故人が其の生涯に於いて最も努力を傾注せるものは、我が民間服飾の研究であって、それは畢竟日本服飾の本質の究明を意味するものであった。最近二・三年来、やや健康を害して薬餌に親しむ。然し乍ら病床に於いて尚も資料の収集と論文の執筆をつづけ、死去の数日前に至る。

昭和十七年五月十四日、東京市神田区駿河台、三楽病院に於いて没す。享年五十九歳。法名を晃徳院釋措衣居士と云ひ、東京市下谷区谷中坂町、宗禅寺に埋骨す。（宮本勢助一九四四）

もともと勢助は歴史画家を志して小堀鞆音に入門、画業の過程で進めた有職故実や服飾の研究をもとに、大正期には風俗史研究家としてその名を知られていった。例えば、安田鞆彦や松岡映丘らと取り組んだという大和絵の研究サークルは、松岡が画業でその成果を形にしていったのとは異なり、勢助はその知識を風俗史あるいは考証の分野において活用していった。

そうして形成した学問は、都市の知識人に開かれた土俗学のサークルの『集古会誌』や、東京帝国大学人類学教室の『東京人類学会誌』、柳田國男の『郷土研究』といった雑誌に

において披瀝され、勢助は生涯に二〇〇本を超える服飾・言語・伝説・関係・民俗・紀行など広範な分野の文章を書いたとされる。まとまったものとしては一九三三（昭和八）年刊行の『民間服飾誌履物篇』（宮本勢助一九三三）が知られている。柳田國男企画した炉邊叢書には、『山袴誌』が予定されていたが、未完に終わったのは残念である。

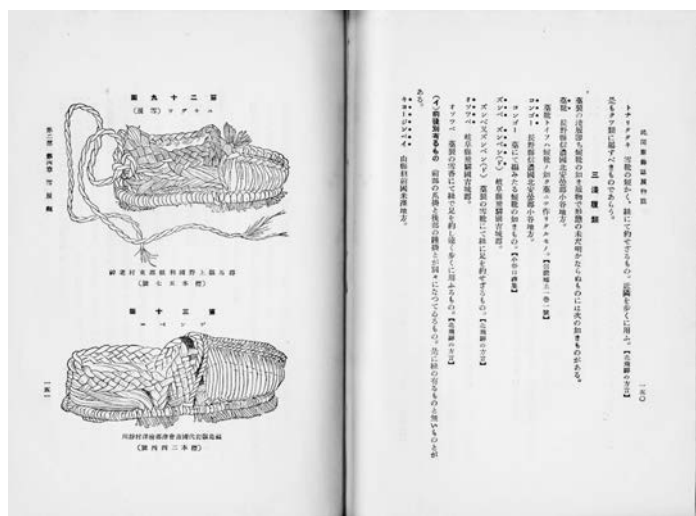
勢助は、民俗学成立の草創期に、すでに採訪旅行による民俗誌の記述を始めていた。昭和に入り渋沢敬三がアチック・ミュージアムの活動を本格化させると、勢助はアドバイザー的な立場で参加することとなった。アチック・ミュージアムのひとつの成果である『所謂足半に就いて（予報）』（アチック・ミュージアム一九三五）は、『民間服飾誌履物篇』の研究方法与相似する部分が多く、勢助の履物や山袴に範をとったものと思われる。

この方法は、勢助の息子でのちに民俗文化財の確立に大きな役割を果たした宮本馨太郎に継承され、服飾と食制の民俗研究において成果を上げた。しかし、戦後の民具研究は民俗学の主流になびくように地域研究としての性格を色濃くしていったために、風俗史あるいは文化史としての色彩を弱めていった。

初期の民俗学には、宮本勢助や関西で活躍した江馬務、玩具研究で知られる西澤笛畝などの風俗史の流れがあった。勢助の山袴研究は、そうした民俗学が学としての体制を整備する以前の、いくつかの物質文化研究の試みのひとつであった。



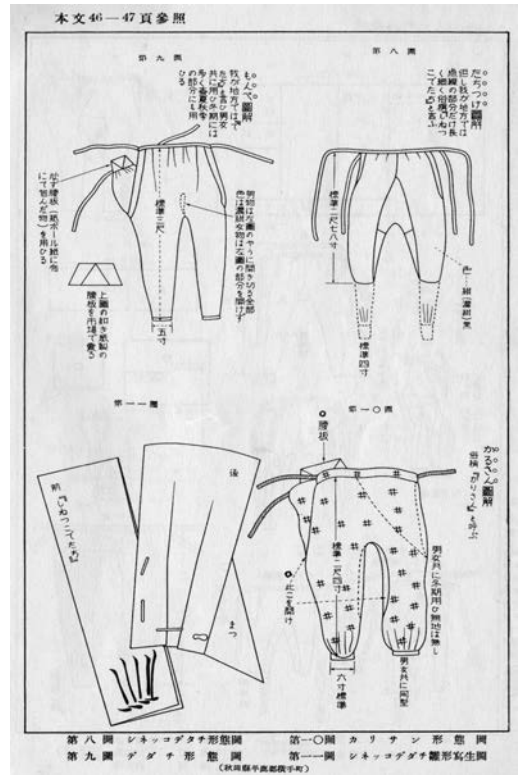
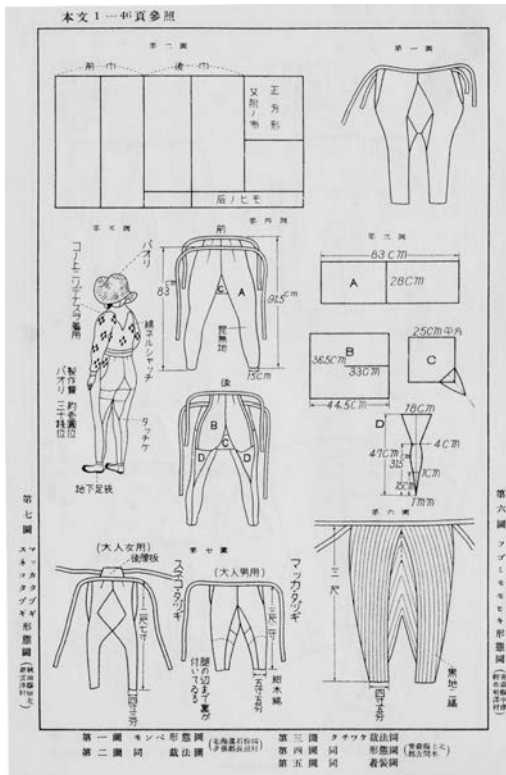
『麝香の臍』



『民間服飾誌履物篇』の内容

3 山袴とは何か

山袴（やまばかま・さんぱく）とは、一般に農民の労働用の袴をいう。山は野良といった意味であり、座敷袴に対しての名称である。宮本勢助は、山袴という研究対象の設定において、以下のようにその問題意識を説明している。



『山袴の話』の図版

ハカマと云ふ語は広狭二様に使用せられ、現在我々が狭義にハカマと呼んでゐるのは日常主として威儀を正す為に穿く普通の袴一檔高袴、行燈袴等の一のことであるが、其ハカマに対して等しくハカマ—広義の一であり乍ら多くの場合にハカマと呼ばずに特に最狭義のハカマと区別する為めに特殊の名で呼ばれてゐる様々のハカマの一群が、現在民間服飾として儼存している。(中略)

高等服飾とも云ふべき種類に属する袴に対して存在する民間服飾に属する是等の袴の一群を総括して我々は仮に是をヤマバカマ(山袴)と呼ぶことにしてゐる。

ヤマバカマの語は、現在地方では方言として狭義に使用せられてゐるから、此広義なヤマバカマの語と混同してはならない。山袴の学術的研究の必要なことが世間ではまだよく考へられて居らぬが、是は今後確りと認識して貰はなければならない。

勢助の研究において、山袴は学術的な概念であり一群のモノをそこに含めて研究対象化するカテゴリであったことがわかる。そして、儀式で用いられるかしまった座敷袴に対し、民間において多様で雑多に存在する袴を研究対象とし、そこから服飾の歴史を明らかにしようとしたのであった。

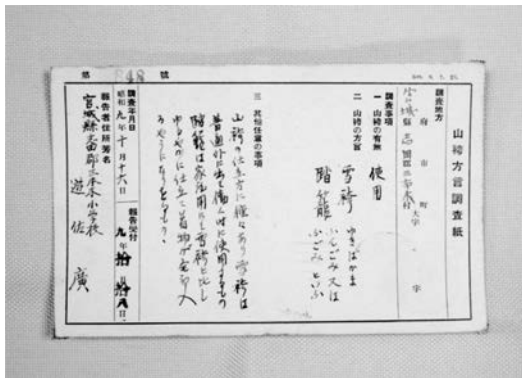
民間で用いられてきた山袴について、勢助は仮説的に次の形式分類を設定していた。甲

型＝タチツケ系統、乙型＝モンペ系統、丙型＝カルサン系統である。この分類は文献や画像資料をもとに研究した結果として作成されたものと思われる。勢助は、そうした形態と地方で使用される方言との関係について知りたいと考えるようになり、悉皆調査を企画することになる。それがここに資料紹介する昭和九年の「全国山袴方言調査紙」と、それをもとにしたより詳細なピンポイント調査である同年からの大日本連合青年団による山袴全国調査であった。

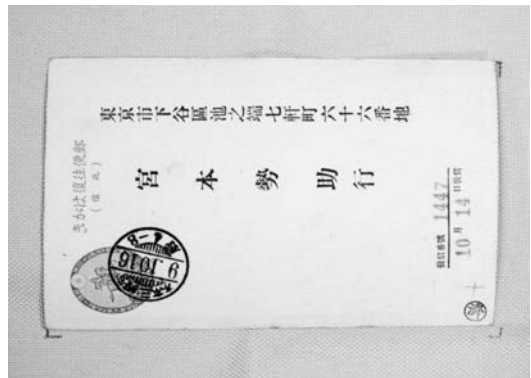
4 一九三四（昭和九）年の宮本勢助による山袴全国調査

山袴全国調査には、前段階がある。それは大正期から昭和初期にかけて、全国の在野の郷土史研究家や民俗研究者と交換されてきた書簡での調査資料である。これは現在、宮本記念財団で四冊の資料集として保存されている。この意義深い資料も一切未調査であり、その内容を明らかにすることで、この昭和九年全国調査がいかに企画されたかが明らかになるであろう。

勢助が昭和九年に山袴の悉皆調査を企画したことには、意味がある。前述のとおりその前年の昭和八年、勢助は民俗学あるいは風俗史の初めてのまとまった成果である『民間服飾誌履物篇』を公刊した。本書は、草履や草鞋といった履物の系譜、多様性について、歴史的・文化的に明らかにしたものであった。履物の研究で一つの成果をあげた勢助が、次に穿き物に着手するのは自然である。



調査紙文面例



調査紙宛て名面例

方言調査は往復ハガキを用いて行われた。往復はがきの往信面には、おそらく依頼文と調査の意図、回答を求める情報の内容などについて書かれていたものと思われるが、現在のところ往信面は発見できていない。返信面には、あらかじめ調査紙の様式が印刷されている。報告者は質問項目に対し、直接記述欄に書き込むのである。報告者が書き込む内容は、「調査地方」、「山袴の有無」、「山袴の方言」、「その他任意の事項」、「報告者住所芳名」である。

今回の調査では、すべての調査紙をデータベース化したことで、それを並べ替えたり抽

出したりして昭和九年調査の具体像が明らかになった。

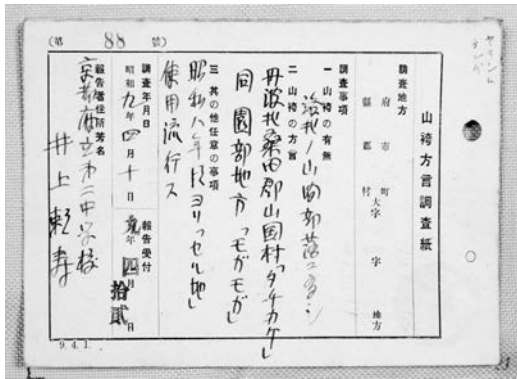
まず、この調査において、勢助は何通の調査依頼をしたか。それは宛名面に記載されている「発信番号」によって知ることができる。この番号は勢助が往信の発送時に記したもののと思われ、その最大の番号は「1501」である。そして現在宮本記念財団に保管されている返信はがきは九四七通である。すなわち一五〇一名以上の各地域の識者に依頼し、そのうち九四七名から回答を得たことになる。約六三%の回答率である。

次に、この調査紙を勢助がいつ発送したかの手掛かりについて、データベースの分析から得られた。調査紙の文面の左下には、「9.4.1」という数字が記されているものが二八三件ある。また右下に「500.9.5.6」とあるものが三一五件ある、また「500.9.7.20」と記されているものが三二六件ある。その他、数件別の数字のものがある。右下の数字と左下の数字が重複して書かれている調査紙は一枚もない。この数字から連想されるのは、この調査が昭和九年に実施されていることから、日付の略記ではないかということである。つまり「9.4.1」は昭和九年四月一日、「500.9.5.6」は昭和九年五月六日ではないか。試に、この右下、左下の数字を「9.4.1」、「500.9.5.6」、「500.9.7.20」と並べてみると、回答の到着時に記されたと思われる「報告受付」の日付が、ほぼ昇順で並び、その日付は右下、左下の数字よりも遡ることはない。問題は500という数字である。これは仮に最初の日付「9.4.1」に五〇〇通の葉書を出したとすると、その回答数が二八三件であるから回答率は五三%である。全体の回答率が六三%であるから、大きな違和感はない。同様に次の「500.9.5.6」は三二六件で六三%、「500.9.7.20」は三二六件で六五%である。

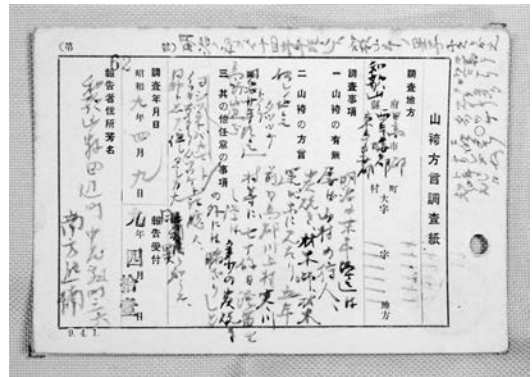
これらから総合すると、勢助は昭和九年の四月一日に、この調査紙をまず五〇〇通一斉に発送し、次に翌月の五月六日に五〇〇通発送し日付に500を追記、さらに七月二〇日に五〇〇通発送し、あとは散発的に調査紙を適宜発送していった。これを合計すると一五〇〇通あまりとなり、発信番号からわかる全体の規模の一五〇〇通以上という数字と違和感なく符合する。

前述のように、調査の回答を勢助がいつ得たのかは、文面の「報告受付」に記されている日付からわかる。最も早い日付は一九三四年四月一日であり、その年のうちに少なくとも九二一通を得ている。最も遅いのは、一九三六年四月一日である。「報告受付」のデータを日付順の昇順で並べ替えると、「號」の欄がほぼ昇順で並ぶ。このことから、勢助は報告者から回答が届くとまず「號」にナンバーリングを施し、「報告受付」に日付を入れたことがわかる。このとき、多くの調査紙に赤鉛筆で地方名を補足する記述を入れたり、方言を抜書きしたりしている。赤鉛筆で書かれた文字は、「勢助記ス～」と書いた記述の筆跡と一致すると思われるので、データ化する際にも「赤字書込み」という形で抽出した。

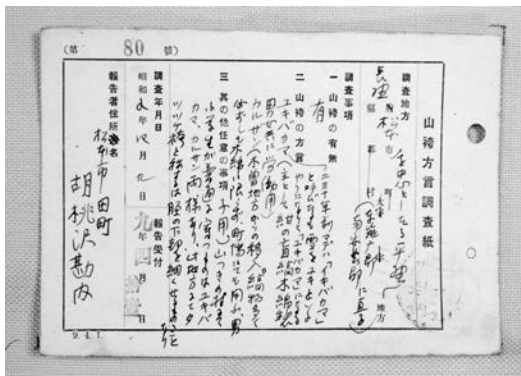
ちなみに、返信はがきの消印の日付も今回の調査ではすべて抽出した。「報告受付」の日付に記載漏れのある調査紙もあるが、それについては消印からおよその受付日を知ることができよう。



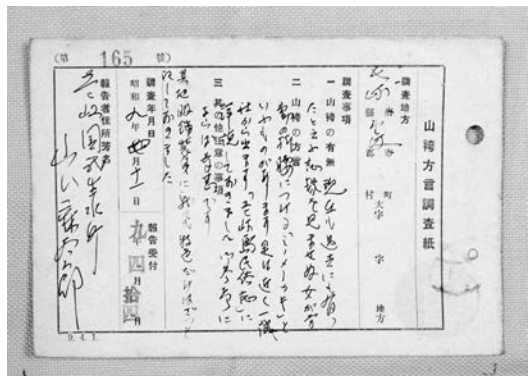
調査紙：井上頼寿



調査紙：南方熊楠



調査紙：胡桃沢勘内



調査紙：山口麻太郎

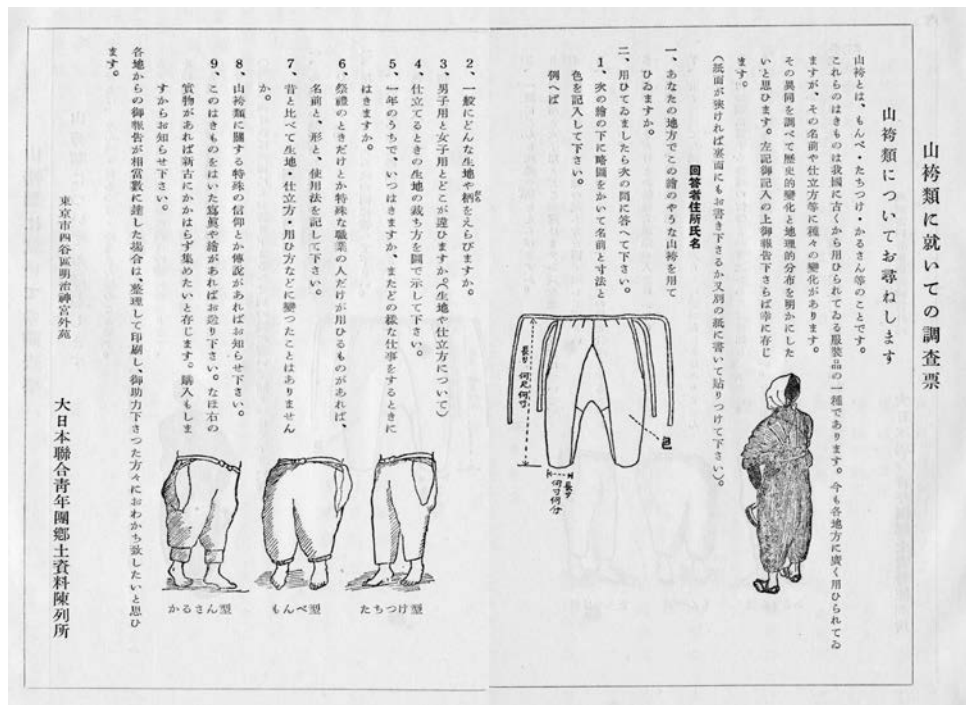
また調査範囲については、「報告者住所芳名」からわかる。それによると樺太、北海道から鹿児島まで、沖縄を除くすべての県の調査紙がある。理由は不明だが、東京・千葉・広島・沖縄の調査紙が一枚もない。また、台湾や満州等の調査紙もない。各県の内訳は表1のとおりである。これから明らかなように、東日本、とりわけ北日本の調査紙が圧倒的に多い。単にその方面の知り合いが多かったのか、もともと東日本の山袴に関心があったのか、その理由は不明である。宮本記念財団に保管されている調査紙は、県別に並べ替えて保管されている。

表1 県別の報告数と割合

県名	実数	%	県名	実数	%	県名	実数	%
樺太	16	1.7	富山	16	1.7	島根	18	1.9
北海道	172	18.2	石川	20	2.1	岡山	20	2.1
青森	24	2.5	福井	21	2.2	広島	0	0
岩手	32	3.4	山梨	10	1.1	山口	13	1.4
宮城	36	3.8	長野	70	7.4	徳島	24	2.5
秋田	20	2.1	岐阜	20	2.1	香川	6	0.6
山形	27	2.9	静岡	12	1.3	愛媛	21	2.2
福島	48	5.1	愛知	13	1.4	高知	9	1
茨城	10	1.1	三重	14	1.5	福岡	11	1.2
栃木	13	1.4	滋賀	12	1.3	佐賀	5	0.5
群馬	13	1.4	京都	30	3.2	長崎	9	1
埼玉	1	0.1	大阪	4	0.4	熊本	14	1.5
千葉	0	0	兵庫	20	2.1	大分	19	2
東京	0	0	奈良	23	2.4	宮崎	8	0.8
神奈川	2	0.2	和歌山	16	1.7	鹿児島	8	0.8
新潟	38	4	鳥取	9	1	沖縄	0	0

5 大日本聯合青年団による山袴全国調査

宮本勢助は、昭和九年の調査を基盤に、さらなる山袴の調査を進めた。この調査は、大日本聯合青年団から研究の依頼を受ける形で始められ、その成果は調査報告書『山袴の話』



大日本聯合青年団による山袴の調査項目

(大日本聯合青年団一九三七) および、大日本聯合青年団郷土資料陳列所での展示として公表された。調査そのものは昭和九年に始めたとあるので、勢助自身の往復はがきでの調査と並行して行われたことになる。

『山袴の話』は、第一「山袴の話」、第二「大日本聯合青年団郷土資料陳列所 蒐集資料篇」の二部構成となっている。前半の「山袴の話」は、勢助が仙台放送局で行った講座の内容をまとめたものであり、山袴の調査研究法や分類等について解説されている。後半の「蒐集資料篇」は、全国の三三名の郷土史研究者に質問した詳細な山袴についてのデータを報告しており、その内容は、調査紙二四枚、冊子二冊、封書五通、葉書五通、スケッチ六枚、写真二枚からなる。調査紙の調査項目は九項目であり、内容は図版のとおりである。また、裁縫図や形態図を六〇点収録し、労働用の袴の全体像が分かるようになっている。

大日本聯合青年団は、この山袴のほか、若者組の調査研究を行っている。調査は、当時高名であった民俗研究家の中山太郎に委嘱しており、『若者制度の研究』(大日本聯合青年団一九三六)として報告書が刊行されている。この研究は若者条目と呼ばれる、村落の年齢集団である若者組における様々な禁止事項や行動規範、作法などを定めた規則を対象にした研究であり、全国的な青年組織の理解を目指したものである。

若者の集団と労働者の研究は、青年層の男女を国民としての一定の規範に当てはめて並列化するために不可欠な情報でもあった。この研究が、直接的に戦時中の青年団の統制、および国民服としてのモンペの成立と、いかなる関連性があるのか。あるいは研究者がそうした行政に対してどのようなスタンスをとったか。それを理解するためのピースはまだそろっていないが、こうした戦前、戦中の民俗研究の実態をたどっていくことで明らかになっていくこともあるかもしれない。

6 重要有形民俗文化財「山袴コレクション」

宮本勢助は、服飾の研究の過程で多くの標本となる服物資料を収集した。勢助自身が採訪旅行で獲得した資料もあれば、全国の情報提供者から送られたものもある。また、柳田國男をはじめ、勢助の研究に敬意を表した多くの研究者が、資料を彼のもとに寄せた。調査研究の進展と平行に、勢助の庶民の服飾コレクションは形成されていったのである。

戦後の文化財保護行政は、一九五〇(昭和二五)年の文化財保護法の成立によって新たなスタートを切る。そして、一九五四(昭和二九)年に美術工芸品や建造物を中心とした「重要文化財」から独立した「重要民俗資料」という新たなカテゴリが設定されることとなった。現在の有形民俗文化財に至る、庶民の生活資料を保護する日本独自の制度の成立である。これに深くかかわったのが勢助の息子である宮本馨太郎であった。この法律の成立当初、他分野からは「民俗資料」なるものを実際にはどのように見出していたらいいのかといった不安や疑念があったようである。平安時代の仏像ならばその資料の価値を認識することはできるが、草鞋ひとつに対してどう価値づけをしたらいいのかということである。これに対して「民俗資料」を指定する側が考えたのは、群資料の指定であった。ある地域

の特徴ある生業の道具一式、ある道具を全国的に収集して比較研究の素材となりうる一群の資料といったものを指定していくのである。

「民俗資料」のカテゴリが成立した時、初めて指定されたのは三件の文化財である。「おしらさまコレクション」、「運搬具コレクション」、そして「山袴コレクション」である。前者ふたつは、アチック・ミュージアムが収集した資料であった。そして「山袴コレクション」は言うまでもなく宮本勢助が形成したコレクションであり、一一九点の資料群からなる文化財である（内訳は、タチツケ型四二点、モンペ型五〇点、カルサン型一四点、その他一三点）。この法律改正後最初に指定された三件のコレクションは、日本の「民俗資料」とはどのようなものを指すのかを表明するものでもあった。

ちなみに現在では、有形民俗文化財が東京国立博物館に展示されることは極めて稀であるが、この三件の「民俗資料」は、指定記念の特別陳列としてで展示された（一九五四年一月一五～二五日）。当時の配布資料である「新指定重要民俗資料特別展観」には、山袴コレクションの解説が次のように記されている。

山袴コレクション（一一九点、付一〇点） 東京 宮本馨太郎 所有

山袴はタチツケ・モンペ・カルサンなどと呼ばれ、各地の農山村において現在も広く着用されている袴の種類であります。和服の着流し姿を見なれた現代の都会の人々の目には、こうした山袴をはいた姿は異様に見えるかもしれませんが、袴は前代の日本服装を構成する上には重要な要素でありました。袴の研究は日本服飾の系統や本質を解明する上に欠くことのできない問題であり、殊に山袴は腰板発生以前（室町時代以前）の古い様式を残しており、さらには袴の発生過程を解明する重要な手がかりを与えてくれる資料であります。

この山袴コレクションは総数が一二九点もあり、故宮本勢助氏が長年にわたって、全国各地から収集されたものであります。この山袴コレクションによれば前布だけの二布型のものから、後布が発生し、さらに後布が次第に長く大きくなり、やがては奥布がついて六布型となり、後の時代の十布型の袴に進歩していく変遷の過程が実によく示されていると同時に山袴の分布状態なども明らかにされているのであります。ここには、そのうちの代表的な形式が、約九点展示されております。



東京国立博物館での展示解説文

馨太郎は、戦前からこのすべての資料の整理に関わっており、その資料の重要性を認識していた。また彼は、アチック・ミュージアムに関わった多くの人々のなかでも、渋沢敬三が「民具」の名のもとに描き出そうとしていた壮大な文化論・文明論を、堅実に継承しようとした人物のひとりであった。その意味では「山袴コレクション」は、戦前の比較研究を軸とした民具研究の有り様をよく表している。戦前の民具研究の代表的な成果としてこうしたコレクションを提示することによって、馨太郎は文化財保護行政における「民俗資料」の確固たる位置を築こうとしたのではないだろうか。

こうした過程において、当然のことながら「山袴コレクション」は物質的な資料としての面のみが重要視されていくことになった。一方で、そのバックデータとしての「全国山袴方言調査紙」や大日本聯合青年団による調査紙は、忘れられていき、それらが脚光を浴びることはその後なかった。

7 「全国山袴方言調査紙」の資料的意義

本調査で資料紹介する「全国山袴方言調査紙」について、筆者は次の点において資料的な意義を有すると考える。

第一に、民俗学会等の組織が編成される以前に、一五〇〇名もの識者が郵便でつながっていたという事実である。しかもそれが全国にわたって展開していることである。彼らの多くは学史に登場しない、地域の名士や医者、学校教員、校長といった在野の知性であった。その多くは当時の郷土教育、郷土研究にたずさわり、民俗学や土俗学、地理学、考古学の雑誌を購読したり投稿したりしていた人々である。

第二に、全国の報告者の記述からは、穿き物の実に豊富な多様性を知ることができることである。一口に労働着といっても様々であり、その方言も一定の分布を把握することができるものの、その理解は人によってまちまちである。加えて、脚絆や前掛けなど、袴と不可分のものとして付帯するものの記述も興味深い。

第三に、モンペが改良服、労働服として普及していく過程、運動着や作業着として学校で普及される過程を示すデータが散見することである。しかも、それがなかなか普及しないとか、もっと使用させようと考えているといった記述が見られる。ある種の国民服としてのモンペは、学校や勤労の現場に積極的に取り入れられていった、あるいはある程度の強制力をもって普及されたという従来のイメージとは、少なからず異なるこれらの記述は一考の価値があるのではないだろうか。

第四に、重要有形民俗文化財「山袴コレクション」のより深い理解につながるデータであるということが挙げられる。このコレクションは、現在も宮本記念財団で展開図の作成や台帳化作業などが進められており、研究途上にある。その全体像を把握し、その資料から庶民の労働着の変遷や展開を明らかにする勢助の企ては、未だ達せられていない。方言と用途の全国規模のデータは、この調査紙において他にはないので、これを素材とした調査研究を進める必要がある。

8 宮本勢助の山袴研究の到達点

宮本勢助の服飾研究は、かなり周到な対象設定と概念規定、分類を目指したものであったことが、一九三四（昭和九）年の『歴史公論』第三卷第八号「八月特輯 土俗小論集」（宮本勢助一九三四）に掲載された「民間服飾研究法概説」によって窺い知ることができる。この論考では、冒頭で勢助の服飾研究の位置が提示される。

従来に於ける服飾の研究は、僅かに他の夫々の学科に従属して存在したもので、其夫々の学科に関係の有る部分だけが其必要程度に応じて研究されてゐるのに過ぎなかつた。服制の研究から出発した我国の服飾学は、専ら其法制史学乃至有職故実学的方面に局限された為め其対象も自ら主として装束を中心としたものであつたが、江戸時代以降狭隘な装束の地域から広大な服飾の天地へと漸次拡大されるに至つたのであつた。更に明治以後、人類学・人種学・民俗学・考古学・歴史学等諸学科の勃興に因て飛躍すべきの時運に際会したのであつた。（105～106頁）

そしてその内容を、「日本服飾の本質」「服飾及び服飾学」「民間服飾」「民間服物」「非服飾的慣習」に分けて体系的に論じている。特に「民間服物」では、丁頭部・胴部・手部・腰部・脛部・足部の六つの大分類を設定し、甲乙…の中分類、イロハ…の小分類の形態分類を提示している。その分類は極めて詳細であり、中分類は四四項目にもなる。さらに非服飾的慣行として、裸足、素足、肩肌脱ぎ、裸体、無帽など、衣服を着装しないこともひとつの装いとして研究対象化している点には驚かされる。明記されていないが、刺青等の身体装飾や、剃毛や髪形、化粧といった身嗜みも視野に入っているであろう。分類の内容の一部を紹介すれば、本研究の資料に関連する腰部の分類は以下のとおりである。

第四 腰部

- (甲) 帯 類 (イ) 縄 (ロ) 組紐 (ハ) 三尺 (ニ) シゴキ (ホ) 平帯・畳帯
(ヘ) 紐 (ト) ヒラゲケ (チ) 男帯 (リ) 幅広帯 (女帯)
(ヌ) ヘコオビ
- (乙) 腰蓑類
- (丙) 尻敷類
- (丁) 犢鼻類 (イ) フンドシ (ロ) 越中フンドシ
- (戊) 二布類 (イ) 二布 (ロ) 一布
- (己) 前垂類 (イ) 小前垂 (ロ) 一布前垂 (ハ) 一布半前垂 (ニ) 二布前垂
(ホ) 二布半前垂 (ヘ) 四布前垂 (ト) イツノ (五布前垂)
- (庚) 股引類 (イ) パツチ (ロ) モ、ヒキ
- (辛) 袴類 (イ) 座敷袴 (ロ) 山袴

勢助の目指すところは、そのすべてを網羅することであつたに違いない。極論すれば、山袴は彼の関心事のうち、四四項目の中分類のさらに下位の一小分類にすぎなかつたのである。

勢助は、山袴の調査研究を柳田國男企画の炉辺叢書で『山袴誌』として刊行しようとしていたことは前述のとおりである。筆者はその内容は、山袴の研究の前に大成した『民間服飾誌履物篇』を踏まえたものになつたはずではなかつたかと考える。すなわち、まず文献渉猟によって労働の袴の変遷を大まかにおさえ、その具体像を絵巻物や絵画資料によって把握する。このとき画家としての観察眼は、袴の形態と人間の動作や身体との関係に対する理解を下支えしたであろう。次に、豊富な方言と使用例のデータによって、日本列島における地域差や多様性について論じる。最終的には収集した標本資料によって、分類を試みる。こうして、歴史の縦軸と、同時代における展開の横軸をとらえた、総合的な物質文化研究を志向する。筆者は勝手ながら、そうした研究成果を想像する。そして、研究はさらに身体の上部へ、つまり上着や被り物の研究へと展開したであろう（現実に、宮本馨太郎はそうした遺志を継承し、『かぶりもの・きもの・はきもの』（宮本馨太郎一九六八）と、『民具研究の軌跡 ―服飾の民俗学的研究―』（宮本馨太郎一九七七）を刊行している）。

ただ、そうした絵空事を描く前に、勢助の書き物を通覧すると、すでに山袴の研究は結論に近いところまで達していたことがわかる。筆者は特に「タチツケ考 ―タチツケの歴史的研究―」（宮本勢助一九四二）という論文に注目している。この論文は、一九四二（昭和一七）年発行の『考古学雑誌』第三二巻第九号に掲載され、クレジットが「故宮本勢助」とあることから、投稿後に勢助が亡くなり、結果的に絶筆の論文となつたものと思われる。

この論文は、タチツケの概念規定と素地の種類を述べたうえで、その歴史的展開を明らかにするという構成をとって、文献と絵画資料の解説を行っている。そこから浮き彫りになつた仮説は以下の通りであつた。

要するにタチツケは、本来純粹の民間服飾であつたものであるが、戦国時代に際して社会の表面に出現したのであつた。そして第一期＝武家服飾期（戦国時代―江戸時代初期）、第二期＝民間服飾期（江戸時代中期―末期）、第三期＝第二次武家服飾期（江戸末期）の三時期を経過して、再び本来の民間服飾となつたのであつた。

勢助は、他の山袴においても一定の仮説を持っていた。例えばカルサンについては、ポルトガル伝来の穿き物が、最初に戦国大名の間で流行し、それが江戸時代に入ってから民間服飾に普及し、職人や下働きの者たちの労働着として広く使われるようになり、ズボンが普及した後も大工や猟師の服装や民俗芸能の衣装などに残存していると位置づけている。

筆者は宮本勢助の学問の最大の意義は、民俗学の胎動期において、服飾研究という分野

で、方言や民具など採訪という一種のフィールド・ワークで獲得した資料を積極的に使用していかうとした点にあると考える。昭和初期の民俗学は、比較研究を主眼としたものであったといってよい。考証に近い風俗史としての性格を有した勢助の服飾研究は、分類や系譜といった博物学的な思考を基盤にしつつ、方言や民具という資料を獲得することでより民俗学に近接する性格を帯びていき、その独自性を獲得していったといえる。

9 調査の契機と経緯

筆者が本資料を初めて実見したのは、博物館学芸員時代のことである。平成二一年三月七日、北條勝貴（上智大学）リーダーとする環境／文化研究会の例会で宮本記念財団を訪問した際、筆者らは宮本瑞夫先生より宮本勢助と宮本馨太郎の物質文化研究についての紹介を受け、同財団が所蔵する「山袴コレクション」や民俗誌映像等の資料を見せていただいた。そのなかで閲覧したのが「山袴全国方言調査紙」であった。その内容は、日本民俗学成立以前の高名な研究者の調査紙を含むものであった。

筆者は平成二一年度（平成二一年）に東北学院大学へ赴任し、本資料の翻刻準備作業を始めた。具体的には、平成二一年一月の東北学院大学博物館の開館に向けた展示作業に、中心にかかわったメンバーと平成二二年度の博物館実習履修学生から有志を募り、文学部歴史学科学学生の佐藤菜美・原田桃子・松田陽子・仲沼由貴・星洋和を中心に山袴資料調査研究会を結成した。

作業としては最初に、平成二二年三月二日に加藤が宮本記念財団に赴き、すべての調査紙の表面・裏面の写真撮影を行った。それをもとに、原田がデータベース作成ソフトのアクセス（マイクロソフト社）を使用してデータベースを構築し、メンバー全員で分担して活字起こしを始めた。作業は学生の授業の空き時間を利用して毎週数時間ずつ進められ、結果的に約七か月で第一次の翻刻作業と調査紙内のイラストのトレース、データの地図上への分布作業などを終えることができた。作業はすべて、大学博物館の実習室で進め、学芸研究員として勤務していたアジア文化史専攻大学院生の岡山卓也は作業の監督補助を行った。夏休みには、学生に一次資料を実見してもらい、山袴についての理解を深めるため、平成二三年八月二四日に加藤・佐藤・原田・松田・仲沼・星、引率補助としてアジア文化史専攻大学院生の柏井容子の七名で宮本記念財団を訪問した。平成二二年度後期は、主要メンバーが卒業論文作成に入ったために作業を中断した。平成二三年二月から再びデータの確認作業を進めたところで三月一日の東日本大震災に見舞われ、作業は頓挫し、主要メンバーはそのまま卒業・進学した。

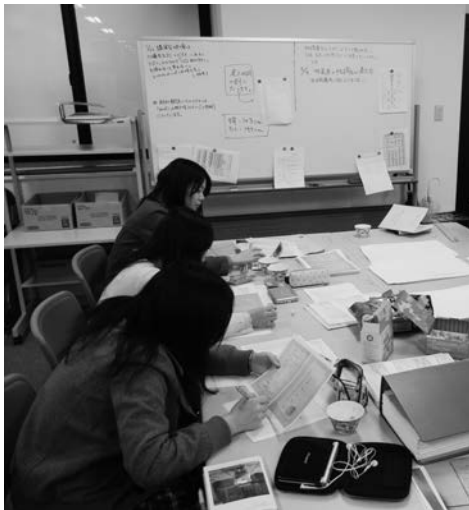
平成二三年十一月、加藤が作業を再開し、二カ月間で翻刻の校正作業を行った。本資料は、洋紙にインクで走り書きしたものが多く、非常に読みづらい。最終的に残った多数の読解困難な文字については、平成二四年一月一日に加藤が宮本記念財団を再度訪問し、一次資料からの読解を試みて補った。このとき、最終的に本資料紹介の掲載の許可を得て、ここに資料の公表に至った。校正時のデータ修正作業には、大学博物館職員の野田豊が行っ

た。

この研究は、大学博物館の調査研究の一環として進め、平成二四年度には成果を公表する展示の開催、大学博物館と環境／文化研究会の共催による報告会の実施などを予定している。

筆者の大きな問題関心は、柳田國男に系譜を求める現在の民俗学史から周縁化されていった、複数の民俗学の水脈を再認識することにある。それを蒐集趣味において研究したのが拙稿『郷土玩具の新解釈 一無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』（加藤幸治二〇一一）であったが、筆者はそれとはまた別の位相にある風俗史的な研究に注目している。宮本勢助の研究への関心は、その点にあるとあってよい。民俗学がその形を整えていく時期、風俗史の講座シリーズが刊行されたり、郷土研究の記述対象として衣食住や風俗習慣が重視されたりする流れは、民俗学の成立と深くかかわっているのではないか。今後ともそうしたことを意識しながら、当時の研究者の研究の実態にせまっていきたい。

今回宮本勢助の昭和九年の「全国山袴方言調査紙」を紹介するのは、筆者のそうした学史への位置づけを念頭に置いてのことである。ただ、資料は様々な文脈で読まれるべきであるので、多くの研究者にこの資料にアクセスしてもらいたい。非常に読みづらい資料であるため、判読できなかった文字も多く残ったままの報告ではあるが、ひとまず全体像を提示することを最大の目標において、資料の提示を行う。



左：大学博物館実習室での解読作業



右：宮本記念財団での調査

参考文献

- アチック・ミュージアム編 一九三五 『所謂足半に就いて(予報)』 同
- 加藤 幸治 二〇一一 『郷土玩具の新解釈 一無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』 社会評論社
- 埼玉県立歴史と民俗の博物館編 二〇〇八 「山袴研究親子二代の軌跡 一宮本勢助・馨太郎と山袴コレクション一」『特別展 名もなき至宝一うけつがれし重要有形民俗文化財一』
- 大日本聯合青年団編 一九三六 『若者制度の研究』 同
- 大日本聯合青年団編 一九三七 『山袴の話』 同
- 文化財保護委員会編 一九六一 『重要民俗資料調査報告書第一集』 同委員会
- 宮本馨太郎 一九六八 『かぶりもの・きもの・はきもの』 岩崎美術社
- 宮本馨太郎 一九七七 『民具研究の軌跡 一服飾の民俗学的研究一』 柏書房
- 宮本 勢助 一九三三 『民間服飾誌履物篇』 雄山閣
- 宮本 勢助 一九三四 「民間服研究法概説」『歴史公論』第三卷第八号 雄山閣、一〇五～一一七頁
- 宮本 勢助 一九四二 「タチツケ考 一タチツケの歴史的研究一」『考古学雑誌』第三二卷第九号 日本考古学会、四四九～四七二頁
- 宮本 勢助 一九四四 『麝香の臍』 文一路社
- 宮本 勢助 一九八六 『山袴誌』 宮本企画
- 宮本 勢助 一九八六 『続・山袴誌』 宮本企画
- 宮本 瑞夫 二〇〇三 「宮本勢助・馨太郎 民具研究の軌跡」『歴史と民俗』一九 神奈川大学日本常民文化研究所、九～二三頁